

THE GAKUSAI No. 10

Forum for Interdisciplinary Dialogue

November 2003

Current Essay

Toward Weaving Webs of Humane and Natural History Yumi Itagaki

Special in this Issue : Toward the Integrative Medicine

Interview with Dr. Kazuhiko Atsumi Taisai Miyakawa
Integrative Medicine

— The Japanese Problems in View of the World Medical Trends Kazuhiko Atsumi
Integrated Medical Care is Essential for the Medical Care
in the Elderly in 21st Century Hajime Hirano

Spirituality and Homeopathy in the Holistic Medicine Kazuhiko Atsumi
Mental Health and Socio-cultural Background in Okinawa

— Salutogenesis toward Health and Longevity in Life Hajime Hirano
Two Images of the Integrative Medicine Kazuhiko Atsumi

Integrating the Western and the Oriental Medicines Kazuhiko Atsumi
My Encounter with Oriental Medicine Kazuhiko Atsumi

Portrait : IWAKURA Mission & KUME Kunitake

Breathing of KUME Kunitake, the Great Encyclopedist Shinji Takata

Studying Science through Chinese Ideograms

— KUME Kunitake's Approach to Western Learning Shinji Takata

Reflections on my Academic Life

My Memories of Professor Yoichi Itagaki

— A Teacher of Passion and Humanism Makoto Taniguchi

A Memoir from my Research Life

Theory — How Influential in Decision Making ? Taisai Miyakawa

Essays

Volunteers and Interdisciplinary Research Hajime Hirano

Intoxication vs. Civilization

— An Introduction to "Anthropology" Kazuhiko Atsumi

"Cities that are Breathing" and their Views Shinji Takata

Series Gryphon's Tail (9)

Book Reviews

Kazuhiko Atsumi & Keiichi Ueno,

Toward the Integrative Medicine Masaru Akiyama

Richard Lewontin,

The Triple Helix: Gene, Organism and Environment Ichiro Horie

ISSN 1346-5678

学際

No.10 November 2003

編集代表 宮川公男

学際

NO.10

統合医療への道

NOVEMBER 2003



学際

『学際』No. 10
2003年11月30日発行

目次

8	巻頭言 岩倉節のすすめ	板垣 雄三
4	特集 統合医療への道 渥美和彦先生に聞く	宮川 公男
9	統合医療—世界の動きをみてわが国の課題を考える	渥美 和彦
18	高齢化時代を迎えた日本の医療のために	折茂 肇
24	ホリスティック医療における霊性とホメオパシー	帯津 良一
32	沖縄の社会文化的環境と精神衛生 —健康長寿要因としてのメンタルヘルス—	石津 宏
41	統合医療の二つのかたち	上野 圭一
48	西洋医療と東洋医療の融合をめざして	下村 満子
52	東洋医学との出会い	仁田 新一
55	—学際人の肖像— 岩倉使節団と久米邦武	泉 三郎
60	偉大なエンサイクロペディストの息づかい	水澤 周
64	漢文で学んだ科学技術—久米邦武の研鑽とその背景—	高田 誠二

表紙デザイン 三小田典子
イラスト 深津 知寿

68	私の研究遍歴	板垣 與一
75	板垣與一先生の思い出—情熱とヒューマンイズムの師—	谷口 誠
79	研究こぼれ話 三、四がなくて	宮川 公男
83	がくさい・えっせい 「ボランティア」と学際	金子 郁容
85	「中毒社会論」序説	森 一久
87	「呼吸する都市」その景観	涌井 史郎
90	シリーズ グリフォンの尻尾[9] —コンピュータの次は何か—	Th.K.オトスキー
99	学際書架 渥美和彦+上野圭一『統合医療への道』	秋山 守
102	R. Lewontin, <i>The Triple Helix; Gene, Organism and Environment</i>	堀出 一郎
106	トライアングル、編集後記	

では、新しい教育システムの提案や行政サービスの評価などを含め、研究分野は、すっかり「社会的」になってきている。それでも、昔の「数学者魂」が顔を覗かせる。社会事象は特異性や個性が重要であることは当然であるが、なにか「原則」はないかと考えてしまう。

「原則」を求めるといことで、近年、関心を持っているのが「コミュニティ・ソリューション」という考え方だ。ボランティアな力が、さまざまな分野で、社会的・経済的問題の解決につながっているのが、その動きの「原則」を、わたしなりに表現したものだ。

これまで、社会・経済の問題を解決するアプローチとしては、政府・行政にお任せするか、市場を通じた企業活動に任せるかのふたつだけだと考えられてきた。近年になって、多くの問題については、「第三の解決法」があることが分ってきた。それは、問題の現場にいる、ないし、その解決に関心をもった当事者同士が集まったコミュニティによる、自発的で相互的なやり方に準拠する解決アプローチのことだ。それが「コミュニティ・ソリューション」である。

コミュニティ・ソリューションの象徴的なケースに、オープンソースソフトウェアのリナックスがある。プログラムのソースを公開し、関心をもった者が知恵を出し合って協力しながらボランティアに作りだされたオペレーティングシステムのカーネルである。リナックスは、誰でも、インターネットを通じて、無料で入手できる。しかし、変更を加えたら、その新しいバージョンのソースを公開することが義務づけられている。ボランティアの集まりが趣味で作り出したともいえる、このリナックスは、現在では、ウィンドウズや商用UNIXに肩を並べる信頼性を獲得するに至った。

コミュニティ・ソリューションは、その気になって、世の中を見渡すと、そこここに実例がある。採算があわないとして企業が撤退し、自治体も手が出せなかったスキー場経営を、地元住民グループがNPOを設立して引き受け、経営的にも成果を上げているという

事例がある。介護保険事業と保育事業を組み合わせ地元企業とも連携しているNPOが年商数億円規模をもち、地域住民に多くの雇用機会を提供している。基本には、個人のボランティアな精神があるのだが、一見すると、まったく異なるコンピュータソフトウェア開発から、介護から、ビジネス支援まで、さまざまな分野で自発的な問題解決が働いていることを知るにつれて、そこには、なにかしらの原則があるはずだ。そんな私の学際的関心が、現在の主な研究テーマにつながっているのである。

(かねこ いくよう 慶應義塾大学総合政策学部)

「中毒社会論」序説

森 一 久



「タイトルだけでも早く・・・」と催促され、苦し紛れに付けたこの表題。果して通用するかと心配になり、字引を漁る。“中毒”には「毒にあたりて身体をそこなう事」としか、でていない。医学辞典でも、和英辞典でもだめ。それでも諦めず、英語医学事典に挑戦、やっとintoxicationを見つけ、さらにこの英語を大英和辞典で引き、“中毒”という訳語のとなりに“酔い”に出会って、又、医学辞典に戻り、アルコール中毒症の説明の中に「依存症」という言葉を見つけて、納得する。

科学や経営の技術の極端な進歩、情報伝播の速さ、それにわが国民の習性が重なって、旨い話や成功例には、瞬く間に猫も杓子も参入する。そして、この大きな渦に巻き込まれて、恩恵や悲運に見舞

われる人が、またそれを羨やんだり恨んだりする人が増えて行く。それだけに、その状況から生じている「中毒」症状の行方が、憂慮にたえない。

私がここで指摘しているのは、人間の全ての行為についてである。即ち、喫煙・飲酒、美容・痩身、恋愛等の人間関係、投資・投機を含む商売、政治活動は勿論、趣味の数々、人の活動の森羅万象に関する状況の、よって来る所以とそのもたらす結果から日々生起している、わが文明の変貌についての、些か哲学的な考察である。

二つの宿命——中毒と進化の矛盾

人間（或いは集団）がよいものや快適な環境を手に入れた時、それが続くことを願うのは当然で、それをさらに改善・拡大するため努力する。それが人間とその社会の、発展の原動力でもあり各種の文明の形成の根源をなしてきたともいえる。

しかしまず、人間が「いい」とか「快適」と感じる感覚そのものが「生れながらのもの」と思いがちだが、これは（殆ど）間違いである。次に「いい」と感じる状況は、その人或いは社会の存続や発展にとって、必ず「いい」と思い込むのは、これまた（殆ど）間違いである。この二つの「間違い」は、いまや科学的にも立証されつつあるが、二つの命題の裏返しや対偶のものも、成り立つ。例えば、「悪い」とか、「嫌だ」と感ずる事が、必ず人間や社会に「良くない」と思い込むのは、（殆ど）間違い、というのもまた真。

二つの命題の正しさを説明するには、とても紙幅が足りないから、端的な事実を一つ二つ。第一の命題について。人間の「空間の上下」の感覚さえ、生まれて後に獲得したもの。人間の理性は勿論感性さえも、その殆どすべて、胎児から成人の過程で、広義の“条件反射”により習得したものではないか。お釈迦さんのいわれる「五蘊六処」^{ごうんろくしよ}も……。第二の命題の例は、麻薬など自明のものが多いが、体内が活性酸素だらけの危険状態の時、ある種の脳内物質が分泌されて当人に「快感を催させる」という皮肉な事例もある。要するに、人は

なんでも甘美なものに中毒し、その依存症になりやすく出来ている。

中毒が利用される怖さ

取り敢えずここでは、第二の命題の結論を急ごう。この眼でみれば、世の中すべて中毒患者。政治では、与党は概ね「政権中毒」で重症。背景に、国民の「政府におねだり」中毒が後押し。教育や勉強は将来楽するため、金儲けのためとされ、これは繁栄（虚栄）中毒。その他「対米依存中毒」など、目下流行中のものは、ほぼ全部この類。

本人さえ楽しいなら、いいじゃないか、という声も聞えそうだが、最大の問題は、中毒や依存症には必ず目的と手段の混同が伴うから、悪意の利用がいつもやさしいことだ。

日本で特にそうなりつつあるのは、やはり個人、組織、国の「存在理由」について、議論も哲学も、はたまた自立も欠如して来た報いであろうか。

（もり かずひさ 社団法人日本原子力産業会議副会長）

「呼吸する都市」その景観

涌井史郎



東京では今、「江戸幕府開府400年」の催事が盛んである。書店に足を向けると、江戸やかつての東京に題材をとった書籍が所狭しとコーナーに並ぶ。木村尚夫氏の「振り返れば未来」という言葉があるが、戦後あまりにも急ぎ足で成長神話に身を委ねてきた東京を、